

館報 教育記念館

No. 87
平成28年11月 発行

きらめき未来塾 お笑い道場



きらめき未来塾 右脳活用道場



梶田隆章氏 ノーベル賞受賞特別展 第14回「さんすう・ワールド展」



主な内容

- ◎教育時評 富山県教育委員会 小中学校課 課長 清田 秀夫 2
- ◎第26回 郷土の先賢顕彰者 稲塚権次郎・中川 幸子 3
青井 忠治・継続顕彰者
- ◎特別展 「郷土の先賢 群像展」 6
- ◎恒例展 「第7回児童・生徒によるものづくり展」
- ◎恒例展 「第14回さんすうワールド展」 7
- ◎「きらめき未来塾」 思考道場 お笑い道場 右脳活用道場
- ◎平成28年度「学ぼう！ふるさと未来」支援事業
- ◎恒例展 「第13回子どもの目 自然不思議発見写真展」 8



発行所／公益財団法人 富山県ひとつくり財団 富山県教育記念館 〒930-0018 富山市千歳町 1-5-1
TEL (076) 444-2000 FAX (076) 444-2001 E-mail: toyama@t-hito.or.jp http://www.t-hito.or.jp
(教育記念館会議室ご利用の場合 ☎(076) 433-2770)
発行人／富山県教育記念館 館長 伏黒 昇 印刷所／いおざき印刷株式会社



最後に残るもの

富山県教育委員会 小中学校課

課長 清田 秀夫

グローバル化の進展や人工知能（AI）の飛躍的な進化など、社会が加速度的に変化をしており、将来の予測が難しい時代と言われている。文部科学省の「教職員等の指導体制の在り方に関する懇談会提言（H27.8.26）」の中に「今の子供たちの65%は、大学卒業時に、今は存在していない職業に就く」「今後10～20年で、雇用者の約47%の仕事が自動化される」といった予測があった。ただし、この予測は米国の大学教授によるもので、日本にそのまま当てはめて考えるのはいかがなものかと思っていた。しかし、日本の大手メーカーが外資系企業の傘下に入ったり、G7交通相会合で自動運転車の討議が行われたり、AIが囲碁の世界チャンピオンに勝利したりといったニュースを見ると、やはり、予測が困難で不透明な時代に向かっており、前述の予測は、現実性のあるものとも思えるようになってきた。

「次期学習指導要領に向けたこれまでの審議のまとめ（H28.8.26）」を見ると、このような状況を踏まえてか、これまでの学習指導要領の改訂の中心であった「何を学ぶか」という指導内容の見直しに加えて、「どのように学ぶか」「何ができるようになるか」の視点から学習指導要領を改善しようとしている。つまり、技術の進歩や社会の変化に伴い、現在学校で教えている内容だけでは、いずれは役に立たなくなるだろう。そう考えると、大切なのは「学ぶことを学ぶ」ということである。

この審議のまとめでは「アクティブ・ラーニング（主体的・対話的で深い学び）」という言葉がクローズアップされていた。アクティブ・ラーニングが目指すのは、子供たちが主体的に、対話的に、深く学んでいくことによって、学習内容を人生や社会の在り方と結びつけて深く理解したり、未来に必要な資質・能力を身に付けたり、生涯にわたって能動的に学び続けたりすることができる子供たちの育成である。評価も、これまでは、知識の量や

技能の正確さで学力が身に付いたとする傾向があったが、これからは、主体性をもって学んでいこうとする子供を評価し、アクティブに学んでいく子供を育成していくことが強く求められるのだろう。

アクティブ・ラーニングについては「すべての学校が対応できるのか」と懸念する声も上がっているが、これまでの学校教育ですでに取り組みされてきているものであり、こうした能動的な学習方法は子供たちに知識・技能を定着させる上でも、また、学習意欲を高める上でも効果的であることが、多くの先生方の授業実践から確認されている。

教育とは、いろいろな学習内容を教えることを通して人間がもっている資質・能力を磨き、発見や創造に導くことであり、決して知識やスキルを教えることそのものではない。子供に育むべき一番大切なものは自分を活かそうとする意欲であり、学びの過程で達成感や自己肯定感をいかに得させることができるかが重要だと考える。アクティブ・ラーニングの視点からの授業改善を大切にしている今回の学習指導要領の改訂が、どのようなものになるか期待をもって注視している。

「教育とは学校で学んだ全てのことを忘れてしまった後に、自分の中に残るものをいう」これはアルベルト・アインシュタインの残した言葉である。学校で得る知識、技術、資格等よりも、それらを得るために、自分の頭で真剣に考え努力する力、目的を達成するために継続する力、そして、その時の学ぶ喜び、その実感、体験等が、生きていく糧になるものであり、これこそが学校で学び、生涯にわたって育てていくものであるという意味ではないかと思う。

子供たちが大人になり社会に出た時に、「学校で得た知識や情報の中には忘れてしまったものもあるが、学校で学んだ時間や、様々な体験は、確かに自分の中にあり、今後も自分を形作っていくだろう」と言ってもらえる教育を目指していきたいものである。

第26回 郷土先賢室顕彰者紹介



「Norin10」で世界を食料危機から救った農学者

稲塚 権次郎 (1897~1988)

稲塚権次郎は、明治30年(1897)2月24日、東砺波郡菘谷村(現南砺市城端地域)西明に、農家であった父竹次郎と母こうの長男として生まれた。幼少より頭脳明晰、勉強に熱心で、尋常高等小学校高等科1年(今の小学5年生)の頃には英語を学び、学芸会で「ワシントンと桜の木」を英語で演説した。明治44年(1911)、県立農学校(現県立南砺福野高等学校)に進学、3年間を首席で通した。卒業後は、小学校の代用教員をしながら家業に励んだ。そうした中、農学校での担任堀口宣治からダーウィンの「進化論」を借りた権次郎は、この本の虜になってしまう。

遺伝や品種改良に興味をもつようになった権次郎は、堀口の勧めに進学を決意、両親や農学校教師らの励ましで準備に取り組み、大正4年(1915)、東京帝国大学農科大学(現東京大学農学部)農学実科に入学した。そこで外山亀太郎教授のもとで蚕の遺伝の研究に励んだ。この体験が後の品種改良の基になる。

大正7年(1918)卒業、農商務省に入省するも、召集により金沢の連隊に約1年間入隊。復帰後の大正9年(1920)、農事試験場陸羽支場(現秋田県大仙市大曲)に赴任し、水稻の品種改良に本格的に取り組み始めた。権次郎は、別品種との交配により各々の長所を引き出し育成する交雑育種法を用い、前任者から引き継いだ「陸羽132号」を「森田早稲」と交配させて新品種を育成した。これが新潟県農事試験場に引き継がれて「水稻農林1号」として全国に普及し、やがて「コシヒカリ」や「ササニシキ」が生まれる基となった。

大正15年(1926)、権次郎は岩手県農事試験場に赴任し、小麦の品種改良に取り組んだ。昭和4年(1929)、新品種「小麦農林1号・2号」の育成に成功、昭和13年(1938)までに8種類の新品種を作出した。その中で昭和10年(1935)に登録されたのが「小麦農林10号(Norin10)」である。寒さに強く生長が早く、穂が大きく穂数が多いにもかかわらず背丈が低いために倒れにくいという特長をもつ品種であった。戦後、この種子はアメリカに渡り、さらにメキシコで小麦の研究をしていたN・E・ボーローグ博士の手に渡り、メキシコの小麦との交配により、従来2~3倍の収量も可能となる品種が幾種類も作出された。これらがインドやパキスタンなど、数多くの国々に広がり、それぞれの国土に適した品種が作出された。こうして1960年代、「緑の革命」と呼ばれる運動が広がり、世界の多くの人々を飢餓から救うこととなった。

権次郎は、昭和13年(1938)に中国の華北産業科学研究所に赴任し、「小麦華農1号」を開発した。帰国後の、昭和23年(1948)、農林省金沢農地事務局に赴任し、河北瀉干拓計画などの開発計画を指導した。昭和32年(1957)、定年退官すると故郷に戻り、西明地区の農業基盤整備拡充事業に尽力するなど、一貫して農業の向上に尽くした。昭和46年(1971)、「小麦農林10号」育成の功により勲三等瑞宝章を受章。昭和56年(1981)10月、金沢で開催された日本育種学会でボーローグ博士と初対面し、感謝を伝えられた。

昭和63年(1988)12月7日早朝、家の前の農地溝脇に倒れ、91年の生涯を閉じた。

平成28年度も引き続き顕彰される郷土先賢者



黒部西瓜の品種改良と流水客土の実現に力を尽くした農業技術者

伊東 森作 (1897~1997)

明治30年(1897)に下新川郡大布施村(現黒部市大布施)に生まれる。

大正後期、売れない黒部西瓜の品種改良に取り組み、昭和13年(1938)、ようやく病気に強い「新黒部西瓜七号」の開発に成功した。

昭和14年(1939)から郡農会(現農協)技師となった森作は、黒部川扇状地特有の砂質浅耕土と冷水のかけ流しの改善のため「流水客土」を考えた。しかし、自分の立場に限界を感じると、県議会議員として事業化に一途に取り組んだ。昭和26年(1951)、日本初の流水客土が県営事業として着手された。効果は括目に値した。農民の生活をよくしたいとの信念を貫いた生涯であった。



自由民権運動に女性の地位向上を懸けた先駆的活動家

中川 幸子 (1857~1910)

中川幸子は、安政4年(1857)西加積村上島(現滑川市上島)の中川弘光の三女として生まれた。中川家はこの地方を開拓した郷土であった。父弘光は、4年間の江戸での遊学、さらに樺太探検などで研鑽を積んだ後、郷里で塾を開いた。幸子はこの父の元で幼い頃から漢学と儒教を学び、賢く学問好きな娘に育った。

明治6年(1873)幸子は、17歳で下条村五郎丸(現富山市水橋五郎丸)の豪農松波秋成に嫁いだ。親の決めた縁組みで、7歳年上のいとこでもあった。秋成は、金持ちの若旦那そのままに妻・家庭を顧みず放蕩三昧の生活で、厳格な父の元で教育を受けた幸子には耐え難いものであった。幸子は明治12年(1879)夏、離婚を決意し、二人の子どもを残して実家に戻った。そして、富山の地を離れ、その後上京。離婚をめぐる深い悲しみ・悩みに苦しむ幸子を深く感銘させたのはルソーの「社会契約論」だった。もっと自由な人間として生きていくために、学び、人の役に立つ活動をしなければならないと思つての決意だった。

上京後、幸子は父の伯父である小永井小舟を頼った。小永井は勝海舟と共に咸臨丸で渡米した儒学者で、浅草新堀で私塾を開いていた。幸子はここで日夜勉学に励み、英語・数学・フランス語まで修得したという。

この頃の東京は、文明開化により自由民権運動や女子の教育熱に満ちていた。こうした中で、幸子の目は、社会を変えるための運動、女性の地位向上のための運動に向いていき、頭山満に教えを受け、その後、板垣退助の門下に入った。尾崎行雄や犬養毅等ともこの頃から親交があった。女性運動家は当時極めて珍しく、明治20年(1887)の栃木県での演説会では、数百人の聴衆の中で唯一の女性であった幸子が、演説の大事なところに来ると「謹聴」と叫び弁士を応援して周囲を驚かせたと新聞に報じられている。また、紫袴を身につけ度々演壇に立ったといわれ、明治23年(1890)の東京木挽町での演説会には千人にも達する聴衆が集まり、男子席にまで溢れるほど多くの女性たちが集まったという。その後も神奈川県や東京の各地で男女同権演説会を開催するなど、岸田俊子や景山英子と並び「民権の三女傑」の一人と称された。

しかし、国会開設が政府により約束されると、民権運動が衰退し始める。幸子ら女性運動家は女性の地位向上と権利拡大を願っていたが、自由民権運動もまた男性中心に考えられていた中で、その訴えはなかなか受け入れられなかった。明治23年(1890)には女性運動が盛んになることを警戒した政府が、「集会及び政社法」を制定し、女性の政治活動を全面的に禁止した。

幸子は、その後、国の役に立つ次代の人材の育成をしようと青少年の教育に力を傾け、明治35年(1902)東京麹町に苦学生を支援する私塾「三省学舎」を開いた。極めて小規模ながらも女性による私塾という点で、東京では異色の塾として有名であったが、資金繰りは常に苦しく、前述の尾崎や犬養・頭山らが援助した。立山町出身の翁久允もここで学んだ。深い学問の知識と自由民権活動を通して得た人生経験に基づいた指導をしたが、後継者には恵まれず多くの人材育成には至らなかった。

裁縫や細工物も得意で人情に厚かった幸子は、明治43年(1910)三省学舎で波乱に満ちた生涯を閉じた。享年53歳であった。

平成28年度も引き続き顕彰される郷土先賢者



アリアンサ富山村創設の父

松沢 謙二 (1901~1963)

明治34年(1901)金沢市に生まれる。農商務省勤務を経て、大正14年(1925)、福野農学校(現県立南砺福野高等学校)の教諭となり、昭和2年(1927)、婚姻により高岡市の松沢籍に入った。当時の富山県のブラジル移民の募集に、いち早く応募し、昭和2年、移民協会の現地責任者となってサンパウロ州ミランドポリス市第三アリアンサ地区に先発派遣されたが、開拓には困難を極めた。

数年後ようやく安定した生活に入るが、勤める富山移住事務所が窮乏し、昭和8年(1933)に閉鎖すると、その後は、一開拓民として生計を立てた。マラリアに侵され、昭和38年(1963)に苦難の一生を終えた。



社会から得た利益を社会へ還元「クレジット」の生みの親

青井 忠治 (1904~1975)

青井忠治は、明治37年（1904）射水郡小杉町戸破（現射水市戸破）に、青井伊八郎とうたの長男として生まれた。青井家は、江戸時代に「伊勢領屋」を名乗る旧家であった。忠治1歳の時、父の破産が原因で両親が離婚した。2歳の時はしかに罹り左目を失明した忠治は、10歳の時に再婚した母を、翌年には父を44歳の若さで亡くし、不運な幼少年期を送った。それでも、祖母はると従姉はるえの励ましを受け、大正7年（1918）富山県立工芸学校（現県立高岡工芸高等学校）木工科に進学した。

当時から木工そのものには関心がなく、販売や経営に心が向いていた。1年生の時に伊藤宣良校長から聞いた、アメリカの鉄鋼王カーネギーの努力や苦勞、財団設立の話は、忠治の心に深く刻まれた。さらに、伊藤校長は「自分の仕事に打ち込むことが周囲の人々を助け、やがては自分のこととして必ず報われる」と説き、黒板に「すべて汝がことなれ」と書いた。忠治には、まるで自分のことが話されているかのように感じられ、処世訓としてこの言葉を生涯忘れず、苦しい時にはこれを思い出して頑張った。

大正11年（1922）3月工芸学校を卒業した忠治は、学校の先輩の紹介で東京芝の家具の月賦販売「丸二商会」に入社した。懸命の努力を続け、4年で最高幹部の一人となり、やがて、貯めた1万1千円（当時の大卒初任給が70~80円）をもとに、昭和6年（1931）2月東京中野に、暖簾分けのかたちで「丸二商会中野店」を開店した。顧客に喜ばれ支持されるように、自ら店員教育を行い、宣伝や広告に力を入れ徐々に売り上げを伸ばした。扱う商品を家具を中心にしたものから注文服、靴へと広げ、良品を大量に仕入れてコストを抑え、安く提供した。それまでの月賦販売に対する悪評を拭い去りたい一心からであった。昭和10年（1935）阿佐ヶ谷に出店し、同時に「丸二」の「丸」に「青井」の「井」を合わせて、「丸井」と改称し、2年後には株式会社化（資本金5万円）した。昭和16年（1941）戦時体制下により、全5店舗の一時閉鎖を余儀なくされた。終戦を迎えると、疎開先の長野県伊那から、早速上京して中野に仮店舗を設け、家具の現金販売で営業を再開した。5年後月賦販売を再開し、昭和35年（1960）には、「月賦」を「クレジット」と言い換えて、日本で最初のクレジットカードを発行した。

「景気は自らつくるもの」という商売哲学の下、昭和40年（1965）に東証一部に昇格し、5年後には月賦百貨店業界のトップ企業に育て上げた。昭和47年（1972）社長を長男忠雄に譲り、会長に就任した。

事業への飽くなき挑戦の一方、忠治は郷土に熱い思いを抱き、昭和38年（1963）母校高岡工芸高等学校に青井記念館・青井文庫を、昭和42年（1967）富山市にアオイ（青井）スポーツハウスを寄贈した。さらに、昭和48年（1973）私財10億円を基金とする「青井奨学会」を設立した。これらの根底には、“一生をかけて得られた私財を惜しみなく社会へ還元する”という崇高な理念が流れている。昭和50年（1975）8月18日逝去、享年71歳であった。

平成6年（1994）青井記念館が現在地に移転新築されたのを機に発足した青井中美展は、今年度第23回を迎え、受け継がれた忠治の志が若き中学生の創作意欲を喚起している。

平成28年度も引き続き顕彰される郷土先賢者



小杉左官の名工（鍔絵）

竹内 源三 (1886~1942)

江戸時代後期の文政年間に活躍した左官職人の五代目、竹内勘吉の五男として、明治19年（1886）、現在の射水市三ヶに生まれた。小学校卒業と同時に左官職人となると、若い頃から才能を発揮し、明治44年（1911）には、25歳で射水郡役所から「一級漆喰（しっくい）彫刻士」として認定された。大正5年（1916）、竹内組を引き継ぎ、県西部を中心に、寺社・土蔵・銀行・公共建築を手掛けた。

源造は、寺社の装飾物の図解や和風の人物画等を参考に、鍔（こて）絵を製作した。「絵」というよりも「彫刻」に近い立体的な造形で、技術的にも優れ、斬新な発想に富んだ作品を多く残している。

特別展

「郷土の先賢 群像展」

3月30日(水)～5月29日(日)



郷土先賢部会では、昭和62年から、毎年数名ずつ顕彰してきました。
現在合計134名の顕彰者となっています。今回はその先賢者全員をパネルにし、一挙に展示公開しました。

現郷土先賢部会 顧問：中村啓志 部長：関原秀明
専門員：松本 純、平野 強、福田 暁、松井功一、根塚昌志、松田啓宏、眞田武志

恒例展

第7回「児童・生徒によるものづくり展」

6月10日(金)～7月10日(日)



県内には、伝統的、創作的な作品の製作に取り組んでいる小・中・高等学校が多くみられます。教育記念館では、発表の場のひとつとして「児童生徒によるものづくり展」を開催しています。

今年も約200点余りの作品が寄せられました。来場者はじっくりと作品を鑑賞し、作品の多彩さに驚いたり、技術の高さに感心したりしていました。

恒例展

－クイズ&パズル－ 第14回 さんすうワールド展

7月15日(金)～8月28日(日)



夏休み期間中に算数の面白さを味わってもらおうとクイズや立体パズルを展示しました。

訪れた人たちは、暑さを忘れ、考える楽しさを味わっていました。

きらめき未来塾（夏休み期間中）

◎お笑い道場 講師

安野屋 仁楽齋（社会人落語家）

◎右脳活用道場 講師

森 みちこ（漫画家）

◎思考道場 講師

滝脇 裕哉 馬場 剛 金森 豊

松原 千佳 大甲 恵美

子どもたちの創造力や表現力、柔軟な思考力を養うことをねらいに、3つの道場を開催しました。参加した子どもたちは、いろいろなことを教えてもらいながら大いに活動を楽しみました。



思考道場

平成28年度「学ぼう！ふるさと未来」支援事業

（助成対象校1校に10万円助成）



27年度 舟見本陣太鼓(ひばりの小学校)

・助成校・

氷見市立十二町小学校
砺波市立鷹栖小学校
高岡市立万葉小学校
富山市立五福小学校
富山市立小見小学校

恒例展「第13回子どもの目・自然不思議発見写真展」

9月2日(金)～10月2日(日)

自然への興味や関心の芽が育つことを願い、子供たちが自然界の不思議を撮影した写真の展覧会を実施しました。今年は100点の応募がありました。



驚いた！(1年)



にじ色(2年)



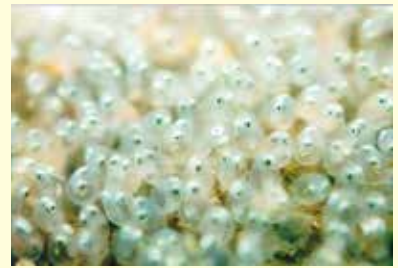
手が階段になっちゃった(3年)



なぞの生き物発見！(4年)



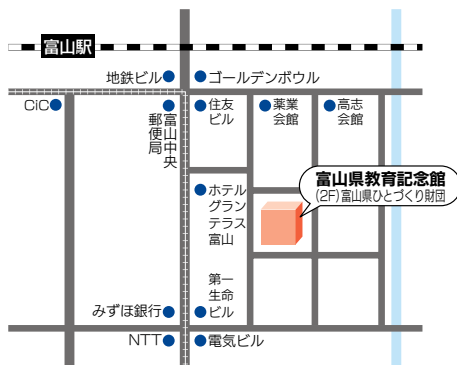
あべこべの空(5年)



たくさんのポニョ(6年)

これからの展示予定

- | | |
|------------------------|---------------------|
| ・ 特別支援学校 みんながんばってます作品展 | 10月28日(金)～11月13日(日) |
| ・ 富山県造形教育作品展 | 11月19日(土)～12月4日(日) |
| ・ 「アイデアロボットフェスタ」ロボット展 | 12月10日(土)～1月15日(日) |
| ・ 富山県中学校美術展 | 1月27日(金)～2月12日(日) |
| ・ 富山県版造形教育作品展・秀作回顧展 | 2月24日(金)～3月26日(日) |



あ・と・が・き

今年は立て続けに台風が上陸し、各地で大きな被害をこうむりました。ここ富山は立山連峰のお蔭でしょうか、災害に見舞われることなく過ごすことができました。この館報がお手元に届くころには、郷土先賢室での新しい顕彰展示が始まっています。どうぞ、富山県教育記念館へお出かけください。